

八木城(別名無)(指定無)(京都府南丹市八木町八木・亀岡市宮前町神前)

八木城(やぎじょう)は京都府南丹市八木町八木および亀岡市宮前町神前周辺にあった城。内藤ジョアンゆかりの城としても有名である。丹波国三大城郭のひとつで、黒井城、八上城そして八木城が数えられている。

概要

JR 西日本八木駅の南西にある、城山(標高 344m)にある複合梯格式の山城である。城郭施設の広さは広大で、山頂部に本丸、支尾根筋にも多数の曲輪などの防御施設が築かれている。現在でも、本丸、天守台、石垣といった遺構が地表面から確認できる。ただ、沿革についてはよく解っていない点が多い。八木城の記載されている史料は多く、『太閤記』『明智軍記』『丹波風土記』『丹波興廃記』『榑井家日記』『内藤盛衰記』『八木町誌』等があるが、『日本城郭大系』によるとこれらの史料は原史料の十分な考察がされないまま引用され、それらが更に孫引用され誤りが多いのではないかとされている。また、丹波守護細川氏の守護代をつとめた内藤氏の居城であった他は、その存続期間や城主の系譜については明確でない点が多く、八木城は有名な山城ではあるが、不明な点も多い。

沿革

元弘 3 年(1333 年)足利尊氏が丹波篠村八幡宮での挙兵に応じた内藤頭勝(定房とも)が戦功により船井郡を与えられ建武 2 年(1335 年)に八木に入ったのが築城の始まりとされる。

明德 3 年(1392 年)、細川頼元が丹波守護に任命されると、管領として在京を常とする細川氏に代わり内藤氏がこの城を守護所として丹波を治めた。

『満濟准后日記』の永享 3 年(1431 年)7 月 24 日に

持之將軍義教ノ命ニヨリ守護代ヲ香西ヨリ内藤備前入道ニ替エル

－ 満濟准后日記

と記され、細川氏の被官となっていた内藤備前入道こと内藤信承が丹波国の守護代となったことにより、八木城は守護である細川氏・守護代である内藤氏の威勢を示すものとして本格的に拡張されはじめたものと推定されている。

信承は嘉吉 2 年(1442 年)もしくは嘉吉 3 年(1443 年)に死去あるいは更迭されたようで、嘉吉 3 年(1443 年)6 月には次の丹波国の守護代として内藤之貞が任じた。また 1449 年(宝徳元年)–1452 年(享徳元年)には内藤元貞と交替していたようである。

宝徳 3 年(1451 年)細川勝元が八木城山麓に龍興寺を建立した。八木村という地名に因み、号を米山とする。

その後上原元秀が文明 14 年(1482 年)12 月に丹波国守護代になったようだが、明応 2 年(1493 年)10 月に長塩弥六との刃傷沙汰があって、同年 11 月に死亡したようである。『大乘院寺社雑事記』の明応 4 年(1495 年)8 月 24 日に、

細川自丹波国上洛、守護代事内藤二返給了

－ 大乘院寺社雑事記

とあるので、上原元秀の父の上原賢家の没落後は内藤元貞が再び守護代に戻ったものと思われる。その後 1505 年(永正 2 年)–1521 年(大永元年)までは内藤貞正が守護代となり、続いて内藤国貞が守護となったようである。

しかし細川氏綱、三好長慶に味方して以降、八木城は幾度か戦場となったが、『細川両家記』等によると天文 22 年(1553 年)9 月に落城し内藤国貞も討ち死にした。その後松永久秀の弟松永長頼が八木城を奪還した。松永長頼は三好氏軍の中で十河一存と並び早くから軍功をあげ、三好長慶の信頼が厚かった人物であったと思われる。『戦国三好一族』によると「丹波が 13 年間に互って三好氏の版図であったのは、

専ら彼（松永長頼）の軍略によるところが多い」と解説している。その戦の天才も『多聞院日記』によると永禄8年（1565年）8月、赤井直正の反撃にあって討ち死にしたようである。

内藤ジョアン時代

八木城は、内藤ジョアン（内藤如安）の居城として厳しい禁教令（キリスト弾圧）を受け、後難を避けるため史料の多くが故意に書き換えられたり、記録が抹殺されてしまったようで、その真偽を鮮明にすることが非常に困難となってしまう。これが有名な城であるが「幻の八木城」と呼ばれる云われで、現在も歴史研究家の調査が継続されている。

内藤ジョアンの母は、内藤定房（八木玄夫の論文『丹波八木城と内藤如安』では、定房は内藤国貞の誤記ではないかとしている）の娘でまず近江国の浅井氏に嫁ぎ一子をもうけたが、夫が病死し子連れで八木城に戻ってきた。その子の名は八木玄蕃といい、内藤ジョアンの義兄となり後に家老職を務めた。その後内藤ジョアンの母は細川氏と再婚したが、またしても夫と死別し八木城に戻ってきた。そのような中、内藤ジョアンの母は松永長頼と三度目になる再婚をし、二子をもうけた。五郎丸後の内藤ジョアンと、妹の内藤ジュリアであった。また『戦国三好一族』によると内藤ジョアンは松永長頼の「実子又は養嗣子と推定されている」と養嗣子の可能性も示唆している。

1553年（天文22年）頃から八上城の城主であった波多野元清の勢力が拡大していき、丹波国を侵し始めた。当時の八木城の城主であった内藤国貞は本梅郷の戦いで討死し、八木城で立て籠もっていた内藤定房も討ち取り、波多野元清軍を前に落城してしまった。この時、内藤国貞の実子千勝丸は、湯浅宗貞が助け園部城でかくまった。八木城が落城した事に対してに激怒した松永長頼は、出陣先から引き返し奮戦の末、八木城の奪還に成功したようである。この時の奮戦ぶりを『足利季世記』によると、
松永ハ内藤備前守ガ聳ナレバ、城中モ一入タノモシク思ヒケル、落武者カク計リケル事武功第一ナリト沙汰シケル

－ 足利季世記

と記載されている。その時の恩賞として將軍から内藤の姓を許され、内藤宗勝と改名したようである。

一方内藤ジョアンは、山口方面よりお家騒動で八木城を頼って逃げて来た女性がおり、名をカタリナといい、『郷土史八木』によると洗礼名しか判っていないとされている。また『内藤如安の生涯』によると、山口で起きた「お家騒動」とは1551年（天文20年）の陶隆房の反乱（大寧寺の変）ではないかと推察している。そのカタリナは、五郎丸と妹ジュリアをわが子のように育て、五郎丸とジュリアもカタリナの影響からキリシタンの道に入っていた。そして永禄8年（1565年）5月に、京の南蛮寺でルイス・フロイスより洗礼を受け、ジョアンという洗礼名を授かったのではないかとされている。

そのような中、黒井城の城主「丹波の赤鬼」と恐れられた赤井直正と、八上城の城主は波多野秀治に代わり、丹波国を手中に収めようと争乱を始めたので、同年8月松永長頼は700兵余りを引き連れ出軍した。氷上郡迄進んだところ、日暮れとなり豪雨となったので近くの寺に宿陣した。しかし、この寺の僧が赤井直正に密告し、夜中不意の夜襲をかけられてしまった。松永長頼も700兵を指揮し奮闘したが及ばず、ほぼ全員が玉碎したようである。内藤ジョアンが洗礼を受けてから3か月後に父を亡くしたことになる。

父を亡くした内藤ジョアンは、八木城の城主に収まったようで、八木城を中心として熱心な布教活動を行っていた。そんな中、現在記録が明確になっているだけで三度日本人修道士ロレンソ了斎を招いたようである。ロレンソ了斎とはルイス・フロイスの弟子で、九州から京都にかけて獲得した信者は6千人にものぼったと言われている。八木城には1572年（元龜3年）-1573年（天正元年）にかけて2回訪問した。この1573年（天正元年）の初旬、2回目の訪問の様子をガスパル・ヴィレラの手紙によると、

パードレ・オルガンチノはロレンソと共に約八日前三箇より当地に着きたり。内藤殿其部下説教を聞かん為め丹波の国に於てロレンソを待ち居れるが故に、彼を迎えに来たる人と共に一昨日常地を出発せり

－ ガスパル・ヴィレラの手紙

と記している。また 1574 年（天正 2 年）3 回目の訪問の様子をルイス・フロイスの未刊の書簡では、時にフロイスは、ロレンソとともに都から丹波の山道をたどった。約二里のところへ内藤ジョアンは家臣とともに出迎えた。城には豪華な祭壇が飾られていた。八日間に七十名の兵が、ついで十四名が受礼した

－ ルイス・フロイスの書簡

と記している。八木城は丹波国におけるイエズス会布教活動の本拠地となりつつあった。

このころより内藤ジョアンこそ城主とすべき派と、内藤国貞の実子、千勝丸（後の内藤貞勝）の擁立を目指す一派とで内争となった。そのような中、内藤定房の兄弟は僧侶となっていたが、内藤氏の血縁でない松永長頼と事あるごとに反抗していたので、内藤ジョアンの母にとっては伯父たちから、内藤ジョアンを城主になることを諦め、また内藤ジョアンの母もキリシタンに改宗するよう迫ったようである。しかし、内藤ジョアンの母は気丈な方であつたらしく、頑としてこれに応じなかったため、僧侶に殺害された。内藤ジョアンは父に次ぎ、母も亡くした。『内藤如安の生涯』によると、母が殺されたのは 1573 年（天正元年）の秋から暮れにかけてはでないかと推察している。『日本史』によると、母が亡くなってからの内藤ジョアンは城主のことなど一向に気にかけなくなり、戦国の世を渡り歩き、ますます信仰の道に深く入っていた、と記載されている。

その後、内藤ジョアンは小西行長の客将となり、文禄・慶長の役で出兵し活躍した。また徳川幕府よりキリシタン禁教令で、高山右近と共にマニラに亡命した。マニラでは「生き神」の如き歓待をうけ、地域の住民からも慕われたらしく、最後は妻マリア、妹ジュリアや子供達、地元の宣教師や修道士に見守られながら昇天したと語られている。73 歳であつた。

八木城の戦い

天正 7 年（1579 年）織田信長軍は明智光秀を総大将に八上城や黒井城を中心に第二次丹波国征討戦に乗り出していた。そのような中、同年 5 月に綾部城、玉巻城が落城すると、丹羽長秀、羽柴秀長らは羽柴秀吉からの要請をうけ三木合戦の援軍として転戦して行った。同年 6 月、当時この地域の一定の勢力を保っていた八木城の城主内藤有勝に軍を向かわせ、八木城を攻城した。

八木城は自然の天険を利用した堅城であつたため、容易に攻め落とすことができず、明智光秀は和議を申し込んだ。しかし、内藤有勝はこれを拒否し、防戦に挑んだ。そこで、明智光秀は八木城の城兵に内通謀反を工作し、これに応じる者があり、城内の本丸、二の丸に火を放った。これを合図に明智光秀軍は大挙して攻め寄せ、ついに落城した。同年 6 月 27 日であつた。この時に城主内藤有勝も戦死したものとされている。

内藤氏の一門であつた内藤正勝は、明智光秀軍を突破し八田城へ向かおうとしたが、落ち延びる最中に、散り散りとなって自害する者も出て、内藤正勝は鴻ヶ獄城に入城したが、ここで没したと思われる。これにより室町時代から続いていた内藤氏は滅亡した。

この戦いの様子は『内藤盛衰記』を中心に記載されているが、内藤有勝、内藤正勝という人物がどのような人物であつたのかよく解っていない。八木玄夫の研究によると『内藤盛衰記』に記載されている「有勝は架空人物。この人物に如安の実績を移し、如安の名は消し去ったのだ」としており、八木城落城の内藤有勝部分はノンフィクションの可能性も示唆している。また松田毅一の論文『丹波八木城と内藤如庵について』では、同盟関係にあつた織田信長と足利義昭が仲違いを生じると内藤ジョアンは「1574 年（天正 2 年）の秋以降、和泉堺に移って以後、義昭のもとに走った」と、八木城の戦い時には八木城にいなかった可能性を指摘している。いずれにしても、この時内藤ジョアンがどこにいたのか、改ざんされたりして明確な史料は残っていない。

廃城

廃城の明確な時期は解っていない。福島克彦によると八木城は明智光秀による改修がなされている点を指摘している。また、国道 478 号のバイパス工事に伴う発掘調査が行われ、『京都府遺跡調査概要』によると、

発掘調査地点は特に明智光秀により大幅に手を加えられた可能性が高く、また遺物からも明智光秀時代の様相が高いと指摘している。内藤氏は滅亡し、丹波国を平定した明智光秀は亀山城（丹波国）を築城し、丹波国の中心も亀山城に移っていくが、八木城は廃城を免れたようで亀山城の支城として存続していた。

城郭

本丸

本丸は、馬屋敷曲輪の左手の一段高い台地が本丸跡である。大きさは南北に 10m、東西に 13m ある。八木城は 1645 年（正保 2 年）に木所佐左衛門、赤井藤右衛門らが測量作成した『八木城古絵図』が残っている。この絵図には四方に牛蒡積みの石垣が描かれている。現在この石垣は約 60cm の土をかぶり石垣は見えない。先の八木城の戦いで落城はしたが、炎上はしなかったようで、灰燼の跡は確認されていない。

金之間曲輪

本丸の西側に突出してあるのが金之間曲輪。名前の「金の間」から推察され、金蔵が想像されている。『八木城古絵図』によると特別の石組みがなされていた一郭があり、金蔵との関連性が指摘されている。ただ、この曲輪はそのような名称より、城郭的に貴重な天守台の祖形が指摘されている。これと似たような天守台が松永長頼方であった笑路城の発掘調査で確認されており、近世天守台の過渡期として『八木城古絵図』にも記載されている。

奥方屋敷曲輪

本丸の北東側に階段状の曲輪があり、その中で一番広い場所が『八木城古絵図』に記載されている奥方屋敷曲輪ではないかと思われる。名称から、領主の家族や家臣が山上生活を営んでいた場所ではないかと推察されている。

二の丸

本丸から西南側に一段低い場所が馬屋曲輪で、平坦地になっている。そこから更に左側に進むと、3m 程度の高い崖に突き当たり、それを登るとなだらかな平坦地がありこれが二の丸である。かなりの広さがあり両側面は切り立っている。内藤五郎の居館があつたのではないかとと思われる。

Wikipedia による

